駿河國薩埵峠
盜賊黄金奪爭圖
下の巻

勸善懲悪
衆合
新編
初編
天保十五
甲辰孟陬

へ13
3873
2

門 へ13
號 3873
巻 2

國芳画 種員作

鍛冶町二丁目
太田屋板

即智を知て猶を殺話

八海山

越後國奥沼郡上田郷明石荘ノ奥龍ヶ洲之圖

毋天

銀山

竟ノ沼

つゞき 奥ハ ひとろの也 を百年と

左の上へ

右の下へ

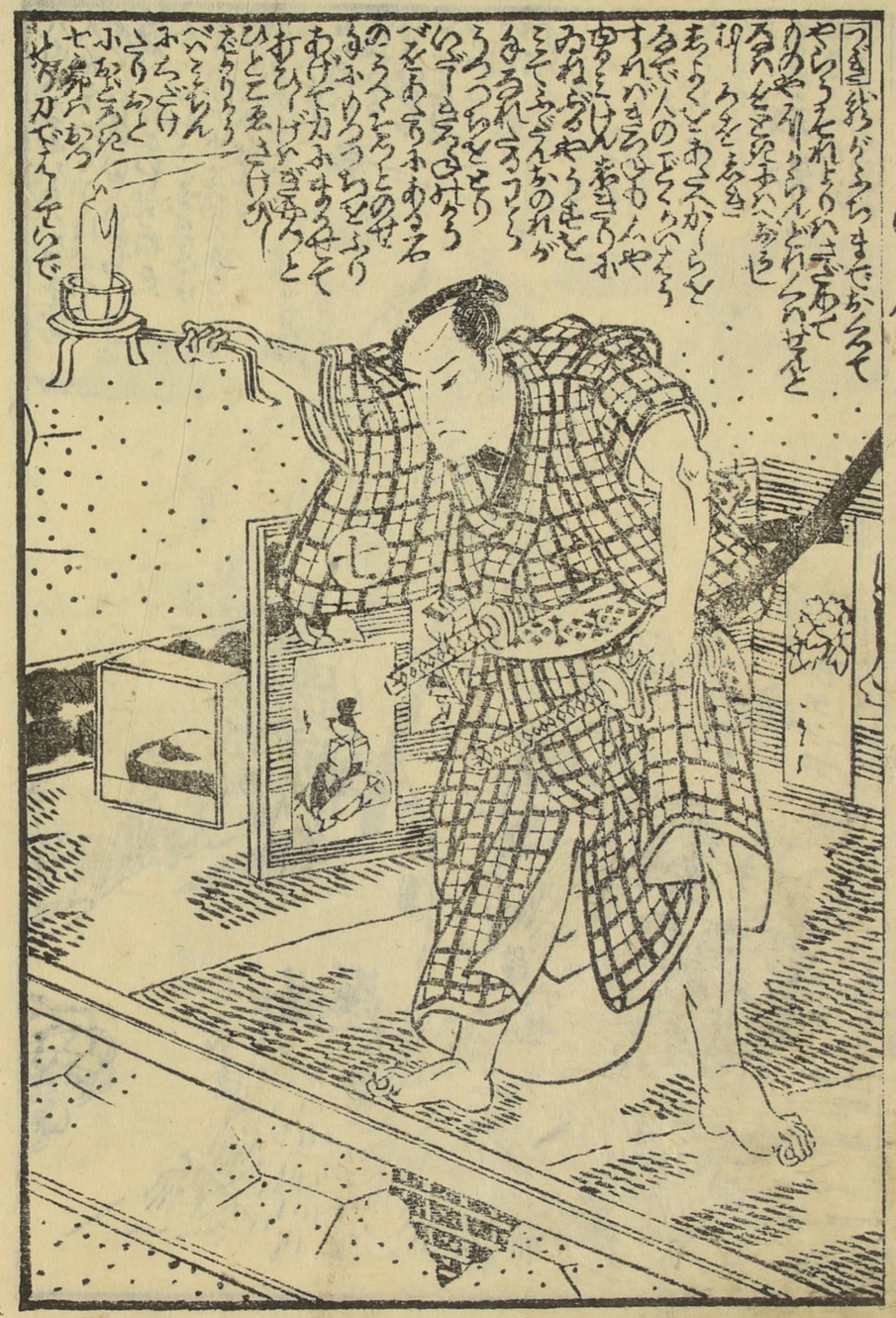
つゞき かくちまぎれてなかなかとろこれでたくさん
目をふさりりこうひこうつぼとも二日の内ふ
こうへまいふてびかちうの人くふ宮仕ハかふ
あるもとこびはるそでところきりつかこを
さてのそ宮ハいたゞれもゞるこうもしふ
この宮仕ハ七年がゝ月ふ八内とふ去り
ゝうふあこうぬ人力ふそ人のかちゝふとのへ
ねさんでこれをゝ年ゝだいこんふそたのあ
どもゝるれゝこのゝうゝぐゝあゝちうの
りのもゝさをまゝこと
ゝあゝりけゝかゝて
宮仕ハ天ハゝるゝゝゝ

つぎは いさゝかとろとびかゝるふくけゑ坂のあろくと
ろろけるつうかとえーけめさえいのちのつきるごや
ありけんセ弁いやもくとこでんのろうとをいけどろく
ゑぐさあるこぶ弁（たちろくろ八内ゑこれをこすろふ
だいこんそそれのめるぐろ七弁がこうひのやうま
ひちどこんかどろえいちどくんド ありとこーよせ
つぐくろふあゝの内ふありるぐらきびを
むきだ 目とりろせさもきこま
おえあくさあろり七弁い八内
ふいひやう「いけどちまく
弁中のめふゝせん
とえ出ともかまで
ろとこんーやろ
るれがこうひの
うちふにげらせ
るべ又ろること八
かこうびいま
たちどころか
おとこあまい
人めこれを
ゑせこのろ人
ゑこかいをこき
ゆくるえんびと
ちこりでこうん
こめころせとりひ
つられがろぐくかんど

左の上段 おぼえこういえんだいたのまを
このうえいえんだいたのまを
それぐうちころすそこと
のけとたちかれがきろれのうへ
ふかゆひろさるりゆくれどふせ
るさろくともげらうめがものちふかへ
せひともこれいたすけこと
るくぐとるりてこびまろふを
七弁もりそあまり がてんの
ちろぬふのれがありさまよの
あるまでこのきろひは
ものとこうんげふあづけこで
とらひすてこうどられば
八内はこのをを
つれ 左へ

八内はるふかりはけんきを
人ををめて目にめぐら
ろくいれのひそいのち
めでこれこのきろねを
ろ一ろちふこちろさえふ
いろふーそちふひんろり
けこううだんるへ
ひとろのちわがひ
るふとこで
きろわは
ゝさころ
べーいのち
とたをけて
つ八こさーと
のふせ弁
われれをそ「えん
ぢいつれこうきの
ふとくつぬぐわは
ととあろぬやろ
ろりいろすて
こちんふかぐろり
かくまでこれんの
ととこいやころ
るこころきろ
ねぐころつ死いは
するこて 右の中へ

右の中へ
やしく
うれーや
かこでけろや
いのちはやろく
たまけころ城の
内ゑ大弁弁 城ダ
ありとろう ぐろうぐく



つぎ　ぬがらこちまでからそ
やらうこれよりハさざあて
りのやりーらんどれいこいせと
るへんをこそ見ハあ也
りろをちるき
ちろくどあえかーらと
るで人のどてらいとろ
すれがきろひもんや
ちろこけん者きろれ
みねらるやうをと
こてふぐえちのれが
ゐるれるうこつ
ろうつちをとり
いでーらえひみろう
べをあうりふあるる
のろくこちろとのせ
ゐふりろうちをふり
あげてかふるせそ
むひーげいぎえんと
ひとこをさけり
ちりろう
べいこちんん
ふちごけ
ふりあと
七郎ハあろ
七郎力でえーをいで

いやりこあれ人ちどろた
ころえんといくこれを
こてめていのちーて
ごひゼー

ちこそ
中郎

ちこそとハ仙西ゑ者でてろえぐ
くれれば八内ハ力ちころ八だんるかこれよりあん
がたらすちくるのるがら手ちる者ちさのどの
れんがゐいともられをたをちる者ちふりと
ちろせもえあんさせてゆくれんのえれこ示と
ミすすーてちちろせべたりハあしいぐ
くふこせ丑人とありをてゆちてなをちれべい
ちるるまちあこてりーこあきひりちハあけをる手
七郎ハかんあんーてよくこをんのつへるをるあくこれ
らハかよをすとハ内をるあきろれの表ぐハい
郎中のりのふこれをこせゆくハあろぐ
くらひーりぐハくハ古仮ゑ表のぐらきと八内が
をくちをかんートを尾どのりこれとちられ
てこちろぐとりふめりぐこれ七郎どのハ
郎ろびとあちりゑ八内ハちきこれふまり
たをてこきてらはもるれ人ともよ

つぎ

せんこんを積て世の話

○その時せんどうの合ふのり合ふむりひきれらいこはこれもとよりのどれかのまろうきのり合いたいやてるり

山崎の油商人

寅六

りとまろうきんはいきをのこちらさのせんどうとりこのこりもそうちとものこりのこりきてあそ舟のてはいかりはいろりはてあそせんれかりはいろりはてあそのりこりのひせんりきをあきてあそきんはいろりはてあそせんりんりはいろりはてあそのりこりのひせんりきをあのありこりのひせんりきをあのこりこりのひせんりきをあのこりこりのひせんりきをあのこ

つぎは わどもあつまりてはぶりをやぶりけるうちに
ぐつたらこぞうはぶりをやぶりけるうちに
ゆうまたぎまつとらをたれしてあ小ざる
ひとろすすーーーとさそとろさまそーの
とうへまあがのめがどをまろろくわろる
げふ食ふるあるさまおろふ
あぐんとアろうちふあ
の中より一人りのかり
うどこそーやきたろて
てろやうちりあげうえた
あろ小ざるを下うちふ
うちとろさえとちる
さまふこれを

つまをたそ ぎつ六ハ
あいて小ざるとあ
かえばくろうど大きふ
てろあくそ一けりのを
うてよとこうるが
つまくがあのたろまこ
ろりそまとさまこびそ子
ろうびかのまもふうちころ
さえとりふぎつ六ちーくめ
ハイやさまくけいくされども
あれこあくりうとのうこれーさ
ぎろとこえ子ざろがかるーむあ
いうふーてもあびんろ二つのさろハこれらが

左の上つぎやへつれやきそごてんと
ふとろふかのさろとれろふこの肉

ぎつ
實六が
三人の子供

かえべーこざろいたすけてくさされよとの
ろうとこそぎやうらびころーてうも
そのまうこうもおつとこちらのあすー
あえふさくろこちらにくさりのひとろる
つらかうさまらがあるこてろてるとと
いふぎつ六ようろびてあえを
さざあこれをうとてこ
まーこさるハあころ
小ざるきこあくさ
ひろふ小ざるふ
ろのあ
又ぎつ
ひとを
あとを

そびめそてろづれ必べさるとたを
けんとせんでをうまれろぎんさん
のとりさくろるふかりうどふ
つこーたまびいりふーと丹波
へいふめむんとふこざるとだの
てのざろ中これもひとろのえ義
ろりひとまろうどやハこちりり
こもかくもあそろをんをそのく
ふこびろうと田へやくべーとんふ
さざめたちあがりうどやく
山いえもせで人ふこスこるぜん
ぐんいるきをとかたきうこをふ
さるとせるろふかひのさる
ダを山ざへたちりり
女房ふやうもをかり
さるをこのごーてんせりれべ
こもぐみよろこひて

つぎは

右の下へ

図 あさふのり
さまこうふんもく
ふびんもーとのまく
まもおくべ又ありうどようこ
まもせんとふちぶさふ
小ざるいくふ
ものんもとは

つゞき　月くことをたすけ玉ひ
たれおのいのちをとゝ玉ふ
つゞきのくるゆもあくるゝ
さひなくしてのほどなりかけ
たてもきのくあぐりたまば
これをろろるすとこゝーも
んやくふてび丹波へ出発
とろぎんをさてのくあることを
たせ小ざるいつぶ子と
のろこもふのとれんごろふ
やーるひけ
子ざるのいとくるゞこ
つこうりのゝこどもゆ
うちまーとアこもの
どくふあをびるど
あてこんとせざかどへ
ちをけるかいのいらく
ちづあくるりんやあこゆの
けぶりさえたてるかどるれば
ふうゆひるそふさうだんして
つまゞざいあこふつのふのあさ
ざいりいところるりいろんてへ
ひきうりいづれともせんものを
さればとそこのことあうりの人ふ
あうせんいろふりてめんがくる

左の上
これをこそ
「アちく生みざらも
きてつけてのづくへら
あきゑとこえさう
えやこちのくんと

とよひおそろふたちのくんとくゝを
ちちてあさくんとるーいそんとさとびかの
さるもあとうつのくてるさまるれば
ふうゆくるよろるゞぶんを
子どもとうれてやくさくもてろくくー
あのふるろふいろふてーさろるれうとそ
さるいつれてゆたくてーどいのいきそて
ゆたくどとちろ六いさるふむろひ
可れくいうんあくくあところゆも
きまひろねこうちの方へ
たちのくるりこれいろ
あよにつれがごけまびよん
ふるくのてあくそこのあさ
ぞふろろくーてさとの大ふころ
るる山ふ入るこもかろくぶふくこ
まあやくふよろるんせよいびいこせば
丹波ぢのあのの波あそこれをたすけ
たろとれるーふんやことせこるみの
ごくいびひーふのまずてやくんいふびん
ふるくうよのるりあきいせびゆるー
ぎひるきこののところむるとさる
ぐろ人ふのどとくつまりろとゆふ
ひいきろすふさるいつひりそろる
だきてたをくことあそあろーが
うろうの方へいでやきたりまろ六ハ　右の下へ

實六女房
お飯

みくろの
るどもを
せるふあひ
又ゑをを
ひのて
ぞんと
ぜーが
ふるさとを
たるるもも
いとのころ
あるくて
ぞやかくと
ひまるる内
まやかりの
るるのるふ
かくてい
ぞてーと
あのてのかを
あるるをと
かのさるい
より
ハ

つぎ かくてきさうてあつ大ふうぬぐそでをりつてひきこむふまさうれ又もあれをのトさりーきさけていらぞるぐらもくののへふひきーくかりまてかぐぐ死山もまれれいこたさうふらいるやうきとこへうりいろいれせんとたのらふふさるいあきさりれあつ六ぐ袖をひのてあんのうくにうるるあうあーたりさるれとれ命びをさーさまとをーゆるやうきるれ六火げふよせてれをこれがすうをりくる目ぬきさりあつ六

左の上分 以火ばさるぐあんをありくのちきさり

つぎ けるいひえふせさうてこのめをたちのくことときこけてらくるいみぐうもかんをありこの目ぬきとのちきさりろくをあろうーてこのこころふあーをころよとのふーとろこもかくもこうひいこでまりあけ兵糸のあ六ぐえのちあきこせてのうえふているふもせんとその夜いあーをこでめけりあつ六ハあろあくきぐ死ふあきて糸へなりあれあ六人の方へいりありーとこーくかこりの目ぬきこのごーてんまろふこれをこそ六きふあどろ死これいよにもめづらしきあうぐよげきくの今目ぬきあり 右の下人

だくりふあうぐあんこうふが日ごろよりあひせんぐんをこのむ丸 神不とけの これをあわきこてんよりさづくるおあめるるべーさいくひつこまこらがあるる人ふゆうだよが目ぬきとのぞむものあり 左人

つぐき これをうけて今ふかく
あてびよふのそ 契やとまあやふ

作者曰
ときふとときあぶう他が
どうれいあくどとうて
あくどきてうまくこ山さんの
ぎつかがどうらいぜんを
わどうてせんきたる
故ふ古語ゆもふ
過福無門
唯人所召
子供おもちゃを
ひろいて善乃ふのを
もてたまうやめでて
是よう舟のうふいへつくまで
後ふくのわがうろい
せろ而のくもはらんのわと
き舞い

新七 柳下亭種員
孫三郎 一勇齋國芳

天保十五年甲辰孟春新板目録

勸善懲悪 乗合噺 前編柳下亭種員作 六冊一 勇齋國芳画

同 二編 近刻同 作

三編四編追々出版同 画

国性爺合戦全三冊 万亭應賀作 渓齋英泉画

幼童教訓 面白ちゑ 代八入 柳下亭種員作 一卷一 勇齋國芳画

大嶋臺猫嫁入 小水種員作 浪の鼓大物合戦 小種員作 單本

菓子 みとせもち 一包代三十二銅
家傳御菓子みなき 面代十六銅
別製 江戸堀町二丁目 小乃和 塗物 木屋九兵衛

版元 神田鍛冶町二丁目 太田屋佐吉